

一口メモ

年齢などの制限で移植を受けられない患者のために補助人工心臓を永久使用する治療(Destination Therapy)が欧米で広まっている。植え込み型補助人工心臓治療の約半数は永久使用となっている。日本ではまだ認められていないが、来年以降に適応を決め、臨床応用される予定。

知りたい!
治療の最前線

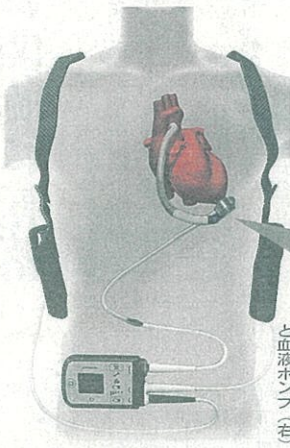
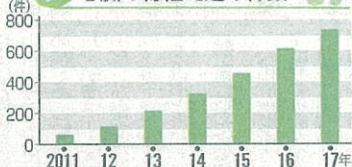
植え込み型補助人工心臓

◇12

国内では毎年約200人の重症心不全の患者さんが心臓移植を必要としています。実際には手術を受けられるまで4年ほど待たなければなりません。しかし、患者さんはそんなに長く自分の心臓だけで持ちこたえられません。移植まで心臓のポンプの働きを助ける機械を体の中に植え込むのが「植え込み型補助人工心臓治療」です。

移植待ち患者支える

国内の植え込み型補助人工心臓の総植え込み件数



植え込み型補助人工心臓のインペラと血液ポンプ

同じく重症心不全の治療に用いる機械として、循環補助用人工内留置型ポンプ「カテーテ

インペラ

という電気の線だけが体から出るだけなので、自宅で生活することが出来ます。場合によっては仕事に就くことも可能です。

グラフに示す通り、国内の補助人工心臓治療は年々増加しています。この治療を行えるのは、多職種でチームを作り、施設基準をクリアした病院に限られています。富山大附属病院は、こし1月に施設認定を受け、8月に県内で初めての植え込みを行いました。北陸地域において今後、この治療の中心施設としての役割を果たしていきたいと考えています。

次回(9月10日)に掲載します。

インペラは経皮的補助人工心臓とも呼ばれます。カテーテルによる挿入が可能で、胸を開く手術の必要がないため、低侵襲に行えることが最大の特長です。

植え込み型補助人工心臓は、慢性の重症心不全の患者さんに対して長期的在宅治療を目指すものです。重症心不全には急激に発症し、機械的に循環補助をしなければ救命できないタイプの急性心不全もあります。インペラは、主として急性心筋梗塞や劇症型心筋炎の患者さんが対象になります。

富山県内では、富山大附属病院が唯一の施設認定を受けています。富山大附属病院は、こし1月に施設認定を受け、8月に県内で初めての植え込みを行いました。北陸地域において今後、この治療の中心施設としての役割を果たしていきたいと考えています。

自宅で生活就業も

薬ではコントロールできず、1〜2年のうちに命を落とす危険性が高い重症心不全に対しては、脳死判定された臓器提供者から摘出された心臓を植え込む「心臓移植」が最終的な治療となります。ただ、日本では臓器提供の数に比べて極端に少なく、年間約60例にとまっています。移植手術までの待機期間は約60日です。



深原 一晃

同副センター長

絹川 弘一郎

富山大附属病院
循環器センター長

65歳未満対象

と長くなり、その間、補助人工心臓に頼ることになります。

心臓移植を前提としていますが、移植登録をした65歳未満の患者さんが心臓以外に大きな病気がないことが治療の条件となります。一般的に植え込み型補助人工心臓は心臓を取り出して置き換えるわけではなく、心臓の先端にポンプを取り付け、大動脈に血液を送る機械です。体の中に植え込まれ、ドライアイライン

ル(インペラ)があります。左心室から血液を吸引し、全身への血液灌流を増加させる補助循環システムで、最近使用可能となりました。従来、救命困難であった患者さんに対して非常に良い結果が出ています。